

国立国語研究所学術情報リポジトリ

グループ文章産出活動における方言と共通語の機能

著者	當眞 千賀子, 小高 京子
雑誌名	国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集 ： 歩こう日本語の世界を
ページ	117-120
発行年	1998-12-14
URL	http://doi.org/10.15084/00003313

グループ文章産出活動における方言と共通語の機能

言語教育研究部 第一研究室

當眞千賀子 小高京子

要旨

沖縄県の公立小学校六年生がグループで文章を作成する過程において、方言と共通語がどのように使われるかを1つのグループ事例について分析した。その結果、書き上がった文章には沖縄方言的特徴が見られないのに対し、グループでの話し合い過程では発話数の12%で方言が用いられていることがわかった。また、文章を口頭産出する発話では方言がまったく見られなかったが、その他様々な種類の発話で広く方言的表現が見られた。さらに、生徒たちは「作文」の表現レジスターとして、共通語と方言に異なる評価を与えていることが推測されるようなメタ言語的議論がみられた。

キーワード 方言、共通語、グループでの文章産出活動、言語コミュニティー

背景および目的

学校教育における方言と共通語の使用については、これまで主に国語政策との関係でその位置づけや是非が論じられてきた。しかし、現在、学校の様々な活動場面で方言と共通語がどのように使用され、どのような役割を果しているのかを明らかにする研究は始まったばかりである。茂呂(1996; 1997)は、一連の先駆的な研究の中で、山形県の小学校における社会科の授業談話を分析し、教師と生徒が織り成す授業という営みを形成する過程で、方言と共通語が異なる参加構造や認知活動と対応して用いられることを指摘している。本研究は、沖縄県の公立小学校を対象とし、児童がグループで一つの文章を書くという活動で、方言と共通語がどのように使われるかを明らかにすることを目的とする。今回は、萌芽的分析として、1つのグループ事例に関する分析を報告する。

方法

1991年及び1993年に沖縄県那覇市と西原町にある公立小学校2校の4年生と6年生のクラスで生活班(男子2人、女子2人)ごとに、自然環境保護をラジオを通して訴えるメッセージを書いてもらい、その過程をビデオ収録した。時間制限は特に設けずに、グループの判断で自由にメッセージを書いてもらった。グループの談話を文字化したものをもとに次のような分析を行った。

沖縄方言の同定：東京で生まれ育った話者がトランスクリプトを見て馴染みのない表現を指摘し、さらに沖縄で育った話者が沖縄で使用される表現であることを確認したものを沖縄方言と同定した。従って、今回の分析ではイントネーションやアクセントなどは、方言同定のため

の情報に含まなかった。

さらに、どのような発話で沖縄方言が用いられているかを検討するために各発話を次の 6 つのカテゴリーに分類した。①TG：文章を口頭で産出する発話（Text Generation）；②TR：文章の内容や構成、表現などについて検討・議論する発話（Text Related Utterance）；③Trp：既に作った文章の一部を読んだり、繰り返したりする発話（Text Repeating Utterance）；④P：活動を進める上での諸手続きや役割分担などに関する発話（Procedural Utterance）；⑤M：活動の状態や方向性をモニターする発話（Monitoring Utterance）；⑥O：冗談やからかいを含めたその他の発話（Other Utterance）。

結果と考察

方言と共通語の使用パターン

活動開始から、メッセージの提出までの活動全体で生じた発話の総数は 524 で、そのうち 63 の発話（12%）で方言が使用されていた。

グループでの文章産出過程で方言と共通語がどのように使われているかについて、実際の談話で具体的に例示しながら報告する。（注：方言が用いられている部分は下線で示した。児童の名前は偽名である）

1. 留美子：日本が世界から沢山の木を輸入しています。（書きつつ） TG
2. 加奈子：なんか、調べたもの 書いているような感じがするってば。 TR
3. 正樹： そうだよ。 TR
4. 留美子：一番文句言われているの何だと思う？ TR
5. 陽介： わからん。 TR
6. 留美子： 割り箸。 TR
7. 正樹： うそ。 TR
8. 陽介： 割り箸は木の余ったところで作られているっていう風に聞いたことあるけど。 TR
9. 要らない部分で、材木として要らない部分で作られている。 TR
10. 留美子： 本当？ TR
11. あれだぜ、ティッシュってあるやし、あれ青木のよ、で一じもう柔らかいところで作ってあるってな。 TR
12. 加奈子： そうなの？ TR
13. 正樹： あー、そう言えば紙なんか木から作ってあるさ。 TR
14. 陽介： おれ達が一番__聴き取り不可能__
15. 加奈子： 自然がないところ__聴き取り不可能__
16. 留美子：一番文句を言われているのは…… 割り箸です。（書きつつ） TG
17. 留美子： で、はい、バトンタッチ。（と紙を陽介の方へ押す） P
18. 陽介： まだやー。 P
19. 加奈子： 陽介君。（陽介に書く役割を引き受けるよう促すように） P

20. 留美子：いきなり、こっちから字が変わるば一よ、な一。 P
21. 正樹：陽介君の字小さいさ。 P
22. 加奈子：だからよ一。 P
23. 陽介：小さいし、字がきたないし、濃ゆいし、だからお前やれ。 P
(紙と鉛筆を留美子に押し返す)
24. 加奈子：なんか、漫画の世界って好きやっさ一。 O

この談話では、発話 1 と発話 16 でメッセージとなる文章が口頭で産出されているが、そのどちらにも方言的特徴はみられず、共通語が用いられている。口頭で文章を産出する発話 (TG) は活動全体を通して 49 回生じたが、1 回を除くすべての発話が共通語だけで構成されていた。その発話も『『それに』がいいあらに、『それに』。(それに、がいいんじゃない?)』というもので、「それに」という接続語を文章に入れることを提案した発話であり、提案された「それに」という表現の部分自体は共通語である。また、産出された文章の一部を読み返したり、言い返したりしてリピートする発話 (Trp) は 32 回生じたが、すべて共通語であった。

上の談話例では、発話 16 の「一番文句を言われているのは割り箸です」というメッセージ文の産出につながる議論が発話 2 から 15 (TR) で行われているが、このうち発話 2、11、13 で方言が使われている。このように、口頭産出されたメッセージ文自体は共通語であっても、それを産み出す過程での情報の提供や吟味、文章の内容や構成、表現についての議論では、方言を含む発話が多く見られる。これらの発話の総数は 277 であり、その 14% にあたる 38 の発話で方言が用いられていた。

談話例の発話 17 から 23 にまたがる 7 つの発話では、書く役割の交代についての交渉が行われており、そのうち 5 つの発話で方言が用いられている。このような、活動を進める上での諸手続きや役割分担などに関する発話 (P) は活動全体で 28 回生じ、そのうちの 8 回 (29%) で方言が使用された。

活動の状態や方向性をモニターする発話 (M) は、32 回生じ、その内の 4 つの発話 (13%) で方言が使用された。また、冗談、からかいなども含めて文章産出に直接関わりのない発話 (O : 談話例の発話 24、加奈子の発話参照) では、106 回のうち 11 回 (10%) が方言を含むものであった。

これらの結果は、児童達が、ラジオを通して自然環境保護を訴えるメッセージを共通語で表現するジャンルの文章と捉えていることを示唆している。一方、文章を産み出す過程は、共通語だけでなく方言も交えたやり取りによって構成されていることが明らかになった。また、文章の内容や構成の検討、活動を進める上での諸手続きや役割分担、活動の状態及び方向性のモニター、さらに冗談やおしゃべりなど幅広い種類のやり取りで方言が使われていることがわかった。つまり、グループでの文章産出活動は、方言を交えた談話を通して共通語のみの文章を産み出すというハイブリッドな構成になっている。このグループ文章産出活動における方言を含んだ談話は、グループメンバー間のローカルな関係を維持・生成しつつ、ローカルな関係と場を超えた聴衆に向かう共通語でのメッセージを産み出す営みを構成している。方言を交えたロ

一カルな言語コミュニティへの参加と、共通語を中心とした全国的な（あるいは official な）言語コミュニティへの参加が、絡み合いながら同時進行していると言えるだろう。

活動全体において方言を含む発話は全発話数の 12% と必ずしも多くはなく、活動全体を通して散在していた。また、発話全体が方言であることは比較的希で、多くの場合終助詞や活用形のレベル又は発話の部分的な表現で方言が使われていた。このような方言の使用パターンがどのくらい一般的なものかについては、本研究のデータから直接に語ることはできない。しかし、ビデオ収録当時の小学校での観察では、このようなパターンが日常的な友達間のやり取りでも見られたことから、普段の方言使用パターンを反映したものである可能性が高い。この点については他のグループの分析結果との比較により、さらに検討を進めたい。また、今回分析の対象となったグループは、生活班として日ごろから教室で様々な活動を共にしている者同士であったが、見知らぬ者同士あるいは沖縄方言に馴染みのない話者を含むグループによる方言と共通語の使用パターンを分析することも、グループでの文章産出活動における方言と共通語の機能の理解を深めるためには必要な今後の研究課題の一つである。

メタ言語的談話

活動が終わりに近づいた時点で、共通語と方言に関する次のようなメタ言語的談話がみられた。

メッセージが書き上がったところで、留美子がそれ読み上げた。メッセージはすべて共通語で書かれていた。それに対し、加奈子は「かたい」と批判を述べたが、他のグループメンバー達は、作文はかたくないといけないと反論した。留美子がわざと方言を使ってメッセージの一部を「このごろ、アメリカのアマゾン川でよ、森林がよ、伐採されているばーよ」と言い変えてみせると、皆笑いころげて、それは笑えるとのコメントがでた。その後、グループは留美子が読み上げた共通語のメッセージ文をそのまま提出し、活動を終了した。

このやり取りでは、たまたま留美子が方言を用いたメッセージ文の例を提示したことから、児童達がそのようなメッセージをどう扱うかを見ることができた。共通語だけでメッセージを書くことについては一度も批判の声が上がりなかったことから、児童達の間で、ラジオを通して訴えるメッセージは共通語で表現されるべきであるという暗黙の了解があることが伺われるが、このやり取りはそのような解釈をさらに支持するものである。文章の適当な「かたさ」の度合いについては児童間で議論があるが、ある程度「かたい」感じのする文章が適当であるという判断に落ち着いており、共通語のみの文章がその「かたさ」を実現しているものとして最終的に受け入れられている。これとは対照的に、児童らは方言を使った口語体のメッセージ文を「笑える」不適当なものとしている。共通語が浸透する以前の沖縄の言語体系は丁寧さや「かたさ」の程度の異なる表現の広がりを持っていたが、そのような広がりには児童のレパートリーの一部とはなっていないのが現状である。子供たちは方言をくだけた談話のレジスターの一つとして使っていることが、このやり取りに反映していると考えられる。